

校長室より

「天空高き」



第70号



平成27年4月10日

山高く水清しー118年の歴史に新たなる伝統を一

長く厳しい寒さに耐えた桜があっという間に満開となり、気が付けば葉桜。今年の春のスタートは足早にやって参りました。

4月8日に付属中学生35名、普通科195名、6年制普通科44名、総数274名の新入生を高水学園は迎えました。

新入生の諸君、入学おめでとう。我々は皆さんを心から歓迎します。これからの学園生活が皆さんにとって、充実した6年間または、3年間になるよう、我々と一緒になって切磋琢磨していきましょう。

本校は4月10が開校記念日で、創立118年目の新学期を迎えます。卒業生は3万人を超え、国内外で活躍しています。やがて、皆さんも社会の一員となります。21世紀の中核となるために、高い志を掲げ、常に謙虚さと感謝の心を忘れず、勉学、学校行事、部活動に全力投球してください。その時に次の3つの「C」を大切にしてください。

Confidence：自分を仲間を信じること。Communication：自分の思いを相手に伝え、相手の思いを理解すること。Challenge：挑戦すること。

そして、これから本学園で3年間、お互いに切磋琢磨しながら、学校生活を送る中で、ぜひ3つの「師」を見つけて下さい。

一生尊敬できる「教師」という師、お互いを励まし支え合いながら、泣き笑いを共有できる「友」という師、そして、生きる勇気と感動を与えてくれる「書物」という師。

きっと見つかるはずです。この3つの師「師・友・書」は、皆さんがグローバル社会の中で生き抜いていくときの、大きな力となってくれます。



明日は今から変えられる

今年度入学の274名の皆さんが「3年後の自律した人間」を目指して、高水学園で今日から地道な小さな努力を積み重ねられることを期待します。

チョークに込められた思いーダストレスチョークー

今本校で使っているチョークは川崎市にある日本理化学工業株式会社で作られています。

この会社は全従業員79人中59人が知的障がい者で、その半分以上が重度障がい者です。

しかし、学校で使うチョークメーカーでは、国内シェア32%のトップメーカーです。

「人にやさしく、地球にやさしい」を合い言葉に「あらゆるコミュニケーションギャップを埋めるためのノウハウ、商品、サービスを開発し、発信していくこと。徹底的に障がい者雇用にこだわり、社内でも相手の理解力に合わせてコミュニケーションギャップを埋める活動を通じ、全従業員の物心両面の働く幸せの実現の追求をしていくことにより、よりよい地域社会、そして皆働（共生）社会の実現に貢献する」ことを事業の目的・意義にされている会社です。

この会社はベストセラーになった「日本でいちばん大切にしたい会社」（坂本光司著・あさ出版）で最初に紹介されている優良企業で、また、テレビでも「カンブリア宮殿」、「報道ステーション」や「サンデージャポン」でも紹介されましたので、知っている人も多いと思います。

今回、関東方面に行く機会があったので、ご無理を承知でメール連絡させてもらい、3月6日（金）午後に見学させていただきました。

案内等をしていただいたのは、管理部佐藤亜紀子さんという方でした。

まず、佐藤さんはなぜ、知的障がい者を採用するようになったのかを詳しく説明してくださいました。

大山会長が、東京・大田区にあった会社に、都立青鳥養護学校（現青鳥特別支援学



校、世田谷区)の男性教諭の訪問を受けたのは昭和34年(1959年)のことでした。

「難しいことは分かっていますが、卒業予定の子どもを会社で採用していただけませんか」。大山会長はとても無理だと断りました。教諭は諦めず、またやって来ました。大山会長は断りました。またやって来ました。3度目の訪問のとき、教諭は「もう就職をお願いするのは諦めました。しかし、最後のお願いを聞いてください。生徒たちに働く経験を1度だけでも味わわせてくれませんか。働くことを経験させた上で、卒業させてやりたいのです」と懇願されました。

その言葉が、大山会長に「2週間の就業体験」受け入れを決断させました。「一生に1回の経験と言われて、お手伝いしないといけないと思った」ということでした。

日本理化学工業は、先代が昭和12年(1937年)に設立した粉の飛ばないダストレスチョークを製造する小さな会社です。就業体験に来た2人の少女の作業は簡単なラベル貼りでした。しかし、時間も忘れて幸せそうに、一生懸命仕事する姿に感動したのはむしろ健常者の社員でした。

就業体験の最終日、10数人の社員が大山会長を取り囲み、少女たちを社員として採用するよう進言しました。「15歳で施設に入り親元を離れるのはかわいそうです。私たちが面倒をみますから」。生徒たちが社員の心を動かし、大山会長もそれに応え、1960年4月から知的障がいを持つ2人の少女を受け入れました。しかし、そのときはまだ「同情」からでした。

採用後にも、大山会長には分からないことがありました。どう考えても、会社で働くより、施設でのんびり暮らすほうが幸せだと思えたからです。ある法事の席で、禅寺のお坊さんにその疑問を投げかけました。すると、次のような答えが返ってきました。

「人間の究極の幸せとは、人に愛されること、ほめられること、役に立つこと、必要とされること、の4つ。このうちの3つは会社で働くことを通じて叶えられる幸せ。福祉施設では味わえませんよ」

大山会長が障がい者を積極的に雇用するようになったのは、それ以降からです。「人間の幸せは人に必要とされて働き、自分で稼いで自立すること。そういう場を提供することが自分のできることではないか」と考え、障がい者多数雇用に踏み切りました。

以上のお話を聞いた後、社内見学を



させていただきました。

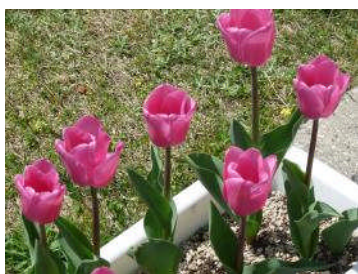
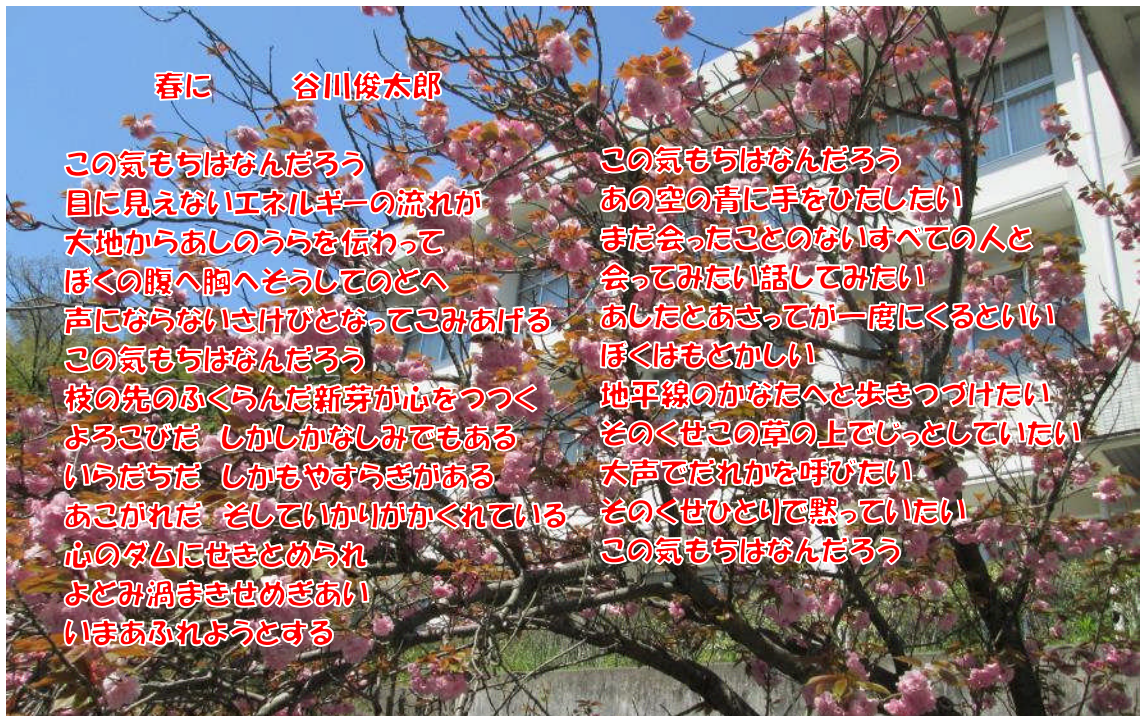
知的障がい者の方が事故を起こさず、かつ企業として経営をしていくためには相当な苦労があったはずです。

社内の壁には、健常者と障がい者が協働して取り組めるような貼り紙が、至る所にありました。

一人ひとりの能力や理解力に合わせて彼らの能力が最大限発揮できるよう創意工夫がされていました。

最終的には、健常者と同じ結果を出せれば、企業経営を成り立たせることができる、ということでしょうか。

日本理化学工業株式会社という会社は、障がい者に「企業で働く喜び」を与え、それによって、彼らが「社会に元気を与える」存在であると、実感させられました。



二十四節気 『穀雨』（こくう） 4月20日頃 全ての穀物（百穀）をうるおす春の雨の意味で、けむるように降る雨は田畑を潤し、穀物などの生長を助ける時季。農家にとっては、種蒔きの適期です。春先に、小雨が降り、ぐずついた天気が続くことを、菜の花の咲く頃にちなんで「菜種梅雨なたねづゆ」といいます。

【出典：ちょっと便利帳】